

夢に向かって

教えることの楽しさを知って——

けんいち
佐久間 健一 さん(県北中3年)

私の夢は、学校の先生になることです。小学校の高学年の頃は小学校の先生に憧れをもっていましたが、今では中学校の先生になりたいです。特に社会の先生になりたいと思っています。小学校の低学年の頃は違う夢を持っていましたが、人に教えることが好きだったこともあり、先生になりたいという思いが強くなりました。

先生になったら、分かりやすく教えられるようになりたいです。学校で教わっている社会の先生の授業は特に分かりやすく、自分もこんな風に教えることができればいいなと思っています。また、生徒に寄り添い、よく話を聴いてあげることで、深く関わり合いを持てるような存在になりたいです。

普段の生活では、なるべく自分から行動するようにしています。生徒会の活動では「あいさつ運動」を行っていて、積極的にあいさつをするようにしています。また、部活動などでは後輩に丁寧に分かりやすく教えることを心がけています。

今後は、ものごとを上手くまとめて、人に伝えられるような力を身に付けていきたいと思っています。学校の授業では、先生が話したり黒板に板書したことだけでなく、『もっと知識を深めたい』という気持ちをもって学習に取り組みたいです。



生徒会副会長を務める佐久間健一さん。所属する吹奏楽部ではコンサートマスターを担当。後輩への丁寧な指導が、県北中吹奏楽部の素晴らしい演奏の秘訣なのですね。



町長
コラム

ま
真こらむ

【第11回】

80 m走と110 m走

子どもたちの歓声がぶつかり合ってる。舞ってる。顔がニンマリする。国見小の運動会。

応援しながら、自分のころとの様変わりを感じる。とりわけ80 m走と110 m走。それも直線じゃない。なぜだ。教育委員会に尋ねると「安全な100 mの直線走路がとれない。運動会は100 mにこだわらなくても良い」という。ん？でも。オリ・パラや世界陸上の人気種目に100 m走がある。直線を一気に駆け抜けるダイナミズムと興奮がある。

国見小の校庭は狭い。でも広げられない。先生たちの工夫の結果が、あの距離と走路なのだろう。ほんとにそれで良いのだろうか。

子どもが我慢や限界、挫折を知ることは生きていく上で大事だと思う。行政も万能ではない。でも、子ども



もや先生の思いとは別に「子どもだからこの程度で良いよね」と、行政の都合で子どもの学びや体験の機会を狭めてしまうことがあるのなら、それは違う。

そんな思いの先に、元気に走り、跳び、踊る子どもたちがいる。子どもに体を動かす楽しさを伝えようと頑張る先生たちがいる。そして、運動会を支える保護者たちがいる。

そうだな、くにみ学園構想を掘り下げよう。

引地 真